旅の收穫

鴛淵一

今夏八月北平文獻館を訪れた時、種々貴重な史料を觀るを得て甚だ羨望に堪へなかつたが、就中余の注意を惹いたのは、滿文老檔の原檔冊、二種の木牌及び一片の紅夷砲關係の文書の三であつた。

滿文老檔が淸初太祖太宗二代の滿洲文で書かれた最も貴重な記錄である事之に無圈點本と加圈點本との二種ある事は、概ね知られて居るが、此二種本が乾隆の淨書本で、其の原檔冊が北平故宮に在つた事は殆んど知られて居なかつた。然も此の原檔冊は先年淸史館實錄庫等々に所藏された各種の貴重な典籍記錄と共に張學良の手によりて南遷され、容易に寓目の機會なきものと案ぜられたが、思ひ掛もなく今夏文獻館に於て之を觀るを得た事は余の絕大の幸とする所である。全冊三十七本、形は大小樣々であるが大概長方形美濃紙型で、一本の枚數も不同であるが全葉數は五百餘枚に及んで居る。紙は元來薄汚い上に煤けて居り、眞に三百年前淸朝興起時代の香を放つが如く、未開であつた往時を偲ぶに相應はしい。其の檔冊の中、天聰六年迄は無圈點字(蒙古字そのまゝ)を以て書かれ、同七年以後は加圈點字とチャンポンに書かれて居る事は、本誌第二號に今西學士の紹介した李德啓氏の阿濟格征明の木牌に於ると同樣である。目下李氏の手により淨書本無圈點老檔と比較校合中であり、何れ遠からず其の成果に接し得ると思ふが、果して全體に於て淨書本に訂正の跡ありや、それがどの位の程度であるか、一刻も早く知り度と思ふと共に、其原檔冊の影寫等の事により余等も自由に之を手にして、此貴重な文獻の充分なる研究のなされる日の近からん事を祈つて止まない。尙之に關しては十月印行の「文獻特刊」の報告の欄を參照されん事を希望する。

第二の二種の木牌は、一は縱二十五糎、橫四糎の扁平のもの、他の一は縱十六糎、橫一・五糎、厚一・五糎の方形に近いものであつて、これ亦加圈點無圈點兩字の混書である事は阿濟格の木牌と同一である。その內容も前者は明への征戰に關したものらしく十一月六日・七日に亙つた戰勝の記事と思はれ後者は山海關よりの逃來の事と征戰捕擄の事を述べたものであるが、內容の實體不分明の點多いので何れ後日研究

して後、機を見て發表したいと思ふ。

第三は紅夷砲に關した一片の文書で縱五十六糎、横十六・四糎、朱書四行に認められて居る。乃ち之を邦譯すれば次の通りである。

Ⅰ八月初二日 jai ging に遣はせり。

Ⅱ固山額眞宗室 baintu に與へたり。

汝等の四十紅夷〔砲〕に鉛を鑄んとする錫一萬（二萬と記して横に一萬と改書す）一千斤。

Ⅲ火藥一萬四千（二千と記して横に四千と改書す）斤。鉛七百〔斤〕。此處にて鑄れば紅夷〔砲〕の口に

Ⅲ合せざるにより汝等を合せしめて鑄よと送り去らせぬ。

第四行の意味明白を缺いて居るが、全體が紅夷砲製造の命令書と言つたものである事は疑なかるべく、四十の砲を造るに要したと思はれる鉛・錫・火藥の量を知る時、當時砲の製造の費用や技術の如何は自ら推測し得られると思ふ。右文中の八月二日といふのは何年を指すか詳かでないが、清太宗實錄崇德七年の條を見るに、

八月戊戌朔。己亥命梅勒章京馬光輝孟喬芳、率劉之源固山下楊名高、祖澤潤固山下李茂、佟國賴固山下佟國印、石廷柱固山下金玉和、吳守進固山下孫德盛、金礪固山下柯永盛、巴顏固山下高拱極・墨爾根蝦、李國翰固山下楊文魁、及鑄礮匠牛彔章京金世昌・王天相等、往錦州鑄神威大將軍礮。

（開國方略は墨爾根蝦を侍衛と譯して李國翰に繫けて居るが、獨立の人名と見られぬでもなく暫く疑を存しておく）

とあつて、八月己亥卽ち二日に錦州で鑄砲した事が知られる。故に此の日時の一致からして右の文書を此時のものとすれば、鑄砲に關する具體的內容を示したものとして甚だ意味あるものと考へられる。尙文中 baintu といふのは實錄の巴顏に當ると見られ jai ging は「再び錦〔州〕」と譯し得るとすれば兩者合致せぬでもないが、今斷言し得ず、唯此に資料を提供して識者の參考に供する事に止めたい。

以上三種だけを此に記したが、之につけても今後文獻館の檔案整理の業が進捗するにつれて、從來の經過に徵して如何なるものが發見されるか豫測出來ぬ事を考へるとき、清初史乃至は清朝全史の研究の前途益々遼遠であり、愈々多忙なるを思はざるを得ないのであつて、新開拓の業が余等に殘された大役であるを思ひ、微力に鞭ちて努力せねばならぬ事を切に感ずるのである。

（昭和一〇・一二・三〇）